

以下の記事を読み、要約を書いて下さい (200 字程度)

=>ぱっと見て良さ気な要約の頭には○を、おいしいものには△をつけています。ただ、正午メ切にしてしまったため全体を丁寧に見れていないので、何のマークもついていないものの中にもいい要約はありました。以後、方法を改善するようにします。

社会学者の開沼博による本連載では、現代社会がいかなる社会かを解明すべく、フィールドワークを通して現代社会のタブーに光を当てていく。

今回のテーマは「売春島」。明治以前から売春を伝統産業としてきたこの島は、バブル崩壊後の不況や情報化によって客足が遠退き、一時は原発誘致の話も持ち上がっていた。現在は家族やカップル向けの観光地として新たな生き残りの道を模索中だが、島を支えてきた伝統産業は近代化の裏で切り捨てられようとしている。

近代日本を表沙汰ではなく支えてきた「売春島」は、バブル崩壊とグローバル化によってその存在自体が無かったことにされつつある。戦後復興期に把針兼の流れを組んだ女性たちの姿は、売春大国の烙印を払拭すべく定められた法律によって、その陰をも求めることができない。表産業として現在は観光に力を注ぐも、売春島は衰退の一途をたどり、復興期を特殊な裏側で支えてきた島の存在を恰も歴史の汚点とするかのように、忘れられてはいけぬ筈の確固たる事実が、ゆっくりと風化しているのを、我々は目を背けてはならない。

○社会的矛盾とリアリティを内包した「周縁的な存在」の解析により、「闇の中」にある現代社会を紐解く特集の第1回。

かつて帆船が乗組員の安息を求め停泊していた島は、明治以降も「売春島」として性産業が黙認されていた。

近年では法整備による摘発、ネット普及による潜在顧客の低下が問題として浮上している。原発による雇用の創出(頓挫)を含む経済施策の考案が求められているが、長年売春に依拠してきた島の産業構造の改変は困難な状況だ。

古代からある島は売春によってその経済を保ってきた。しかし日本経済の衰退による客の減少、摘発、ネット普及に伴う情報の拡散を主な原因として、その伝統産業は存亡の危機にある。経済的回復を考え、原発の導入案がだされるも人々の反対で白紙に。豊かな自然と食を前面に出した観光産業へ力を注ぐも、効果は大きくはない。この島は日本の近代化の犠牲になった、近代化の『裏』の顔といえる。

様々な噂に縁どられた「売春島」。バブル期まで隆盛を誇ったその存在も今はどうか。不況、ネット社会、そして摘発というこの国の変化に翻弄され、しかしいまだ裏の顔を捨てきれないまま今は観光業に光を見ている。さらには島近辺への原発の誘致の話、拒否を選んだこの島の選択。売春も原発もない表の生活への一歩、それは劇薬の無い過酷な未来に踏み込んだことと同義でもある。闇を押し殺しながら先の見えないこの島は、暗闇にある現代社会のリアルかもしれない。

○明治以前は宿や遊女の置屋で有名だった「売春島」と呼ばれる島がある。その島は古代には風待ち港として使用され、その役目を終えた後は売春産業で生計を立てていた。終戦後に売春防止

法が実施されても、むしろ地方にあるその島に「あってはならないもの」として集約されていく。しかし、約 20 年前から警察の取締強化や情報化・売春のターゲットであった農工業者の弱体化により産業は廃れていった。そこで住人は観光産業を重視し始めるも、それだけでは不十分なので売春産業を捨てきれないのが現状だ。

世間でタブーとされる売春によって栄えてきた島は近代化によって排除される存在となり、それによって衰退していった。原発に頼るか自分たちの産業で持ちこたえるかの選択を迫られ、自らの産業で島を守る決断をしたものの、インターネットが発達したことで、それまで隠されていた情報を含め外部の人間も容易に知ることが可能となり、様々な想像のロコミも流れるようになったことで衰退に拍車をかけた。観光地らしい観光地としての産業興しも試みたが、売春と比べると経済的であるとは言えず、島の廃墟化は進む一方である。

明治時代以前から、外部から訪れる人々のための宿、そして遊女たちの置屋で成り立つ「売春島」には、現代社会を見通す契機が眠っている。筆者は「闇の中」にある現代社会を話題にするうえで、「周縁的な存在」をあげているが、「売春島」はまさにそのような存在である。「あってはならないもの」を排除しようとする現代社会の動きの中で、「売春島」は弱体化が進んでいる。長期の不況、警察による摘発、情報化が進む社会といった背景の中、「売春島」はその「あってはならない」部分を切り捨てなければならぬぎりぎりの境地に立たされている。

「売春島」と呼ばれる孤島では、その島の「伝統産業」の売春の取り締まり強化や、客層の変化、インターネットの普及による情報化、島民の高齢化によって徐々に衰退し、その貧しさゆえに原発誘致案まで出てきた。私たちは「闇の中の現代社会」に生きているからこそ、その闇を直視せねばならない。そのためには、「売春島」のような、「中心」から漂白された（と思われる）様々な矛盾やリアリティを含んだ「周縁的な存在」に目を向けなければならない。

「売春島」は、その名の通りの性風俗を「伝統産業」としてきた裏の顔を持つ島だ。日本の産業や人口の構造変化の影響もあり、現在裏の顔は衰退の一途を辿っている。インターネットの普及により、あらゆる情報が透過・可視化される現代、島の秘匿性という大きな価値は失われた。さらに 90 年代後半、日本中で性風俗に対する規制が強化され、島での営業は厳しくなった。現代は「絶対的な巨悪」が存在しない時代だ。私たちは「あってはならないもの」を見つけ出しては浄化しようとする。「売春島」はまさに「浄化」の格好の対象であった。

「売春島」のような「周縁的な存在」から、現代社会が抱える矛盾とリアリティが見える。観光地という「表」をつくらうとしても、伝統産業である売春を捨てきれない「裏」。人口増大、技術革新、消費社会化という「表」に隠された、売春島の「原発誘致をせざるをえない貧しい地域」という「裏」。「あってはならぬもの」が社会から漂白されても、不安と希望を抱えながら歩く遊女たちのように、矛盾を抱える葛藤は確かに存在する。

○現代社会の矛盾は、社会の中心では消されているが、周縁に漏れ出ている。その事例の一つが売春島だ。長い繁栄の歴史を持つ売春島だが、ここ 10 年で目に見えて衰退したという。経済の悪化、情報化、性産業への摘発など現代日本の進む道が島の宿を苦しめる。この貧しい地域に原

発を誘致して挽回を図るという計画も頓挫した。今、島は『表』の営業を模索している。それは地域が生き残るための困難な競争の方法であると同時に、『裏』を切り捨てる時代を象徴していた。

△かつて性産業で栄えた売春島と呼ばれる島がある。しかし、以前のような賑わいはもうない。長期不況、摘発、情報化などが原因だ。再興のために性産業を捨て、観光地として生まれ変わろうとしているが、観光の売上だけで島の経済を維持することは厳しい。売春島は厳しい選択を迫られている。日本の近代化は、華々しい発展を作り出した一方で、表に出せないものを背負わされた地域も作り出した。

三重県渡鹿野島はいわゆる売春島である。古来から帆船の泊まり場であり、海に出られない日は水夫たちが夜に女性を買い、その伝統は高度経済成長期を支えた働く男たちにも引き継がれた。しかし、度重なる規制を受けて性産業は縮小。島は再起をかけて昼のビジネスとして観光業を始めたが、夜になれば島の伝統が姿を現す。そこには、性産業をいやらしい物として見る規範的な社会とそれを一旦は受け入れ漂白されつつも確かに存在する性欲という人間本性の角逐が見て取れるのである。

バブル崩壊後に派遣労働者が増え、会社の経費で売春島に連れてきてもらえる男たちの数が激減した。2000年前後、性風俗の規制が強化され多くの売春婦や島民が警察に摘発された。更には情報化の波によって、島は秘境の地ではなく検索すればいつでも出てくる性風俗の一つになり下がった。観光地としての再建を図るがそれだけでは島の経済は維持できない。原発建設を受け入れてその恩恵に与るという選択肢も2002年には無くなった。売春という伝統産業を失いかけた今、「地域の自立」に向けて島の生き残りをかけた戦いが始まっている。

「売春島」から遊女百人を擁していたかつての勢いは消え、若者の住民は都会へ出ていき、島は存続の危機を迎えている。これは、日本が近代化を成し遂げる過程で生んだ「裏の顔」を切り捨てる営みの一例である。しかし、その「裏の顔」が集約された売春島のような「周縁的な存在」にこそ、現代社会とはいかなる社会なのかを読み解くカギが隠されている。

現代社会から「漂白」されようとしている周縁的な「おかしなもの」を見つめることで、「現代社会の抱える矛盾とリアリティ」は見いだせる。売春が禁じられてからも「公然のタブー」として繁栄してきた「売春島」は、客層の変化や摘発の強化、情報化などによって危機を迎えている。観光地という「表」の顔だけでの存続は難しく、過疎化を止めえた原発の受け入れ計画もなくなった。「売春島」「原発が必要な貧しい地域」という消えていこうとする現実がこの地から見えてくるのだ。

明治以前は「風待ち港」として、そして十年ほど前までは「売春島」として栄えた島は、バブル後の不況や国による摘発、インターネットの普及などによって今では廃墟や空き家が目立つ寂れた島となってしまった。そんな島で客引きとして働く老女との会話で見えてきたのは、売春や原発誘致などの「裏」の顔なくしては到底やっていけないという、貧しく弱い地方都市の厳しい現実だった。

倫理観や価値観…。ある一定の基準に基づいて社会から漂白されねばならぬものがいつの時代も存在する。その一例が売春島である。かつて賑わいを見せていた売春島は時代の流れと共にその繁栄を失った。表の顔を生み出す努力を進めることはできても、島の本来の姿である裏の顔を完全に拭い去ることはできない。売春島の進む未来に確かな光はない。けれども、消えねばならぬものだからこそ必要とされる、その葛藤の中で今日も売春島はもがいているのだ。

世の中は、「おかしなこと」であふれている。私たちは、普段の生活の中でそれらに気づかない。この連載は、現代社会をより正確に捉えるため、「おかしなこと」に焦点を当てていく。今回は、関西地方にある売春島を取り上げる。

その島は明治から昭和バブルにかけて栄華を極めた。バブル崩壊から続いた不況は、尺足をめっきり減らした。安い風俗店が都市部に立ち並ぶ。島の女の子は、売春だけでなく、その時間以外の触れ合いを提供してきた。今では、それを求める人は少ない。

近代化の中で社会から隠蔽され、タブーとなった「売春島」は、農業、工業の労働者が主に利用していたが、バブル崩壊による日本経済の縮小に加え、性風俗の規制強化で摘発されたこと、情報化によるインターネット検索の促進で性風俗としての特権が喪失したことが原因で、衰退していった。花火大会の開催などの「表」の顔もつくったが、それでは経営が成り立たず、従来の「裏」の顔に頼らざるを得なかった。兼ねてから持ち上がっていた原発建設計画も頓挫し、「新たな産業で生き残る地域」への道を選択した。その正否は定かでないが、困難を極めることは間違いない。

○日本の高度経済成長を「あってはならぬのもの」として支えた売春島のあり方が現代の社会構造の変化と共に変化することを余儀なくされている。売春島は隔離されて存在し、隆盛を誇っていたが、現代社会がもたらした摘発と情報化の影響を受け、かつての姿を失っている。摘発により逮捕や検挙のリスクが増大した。さらに、情報化により島の断絶性が失われ価格競争が生じた。しかし、島の産業は充分とは言えず、未だ影を潜めながら「特効薬」として機能する売春に依存し続けている。(222字)

私たちは自分たちが思ってる以上に今生きている世界や社会を知らない。特に現代の社会はより複雑で不透明な分、私たちが見えない社会も多い。著者はそんな現代社会の骨格を浮かび上がらせるべく、一つの例として売春島を描く。長年、売春を主産業としてきたある島も、近代化によりその側面を抑え、別の表情を見せなければ成り立たなくなった。また、一方では原発建設の話が浮上することもあり、「売春島」という一見社会とはかけ離れた、別世界のような印象を受けるこの島も現代の社会問題に密接に関わっているということを感じさせられる。

△経済的な発展を遂げた日本は、かつての希望や高揚感を失い自分たちにとって異分子であるものを排することによって充足を得る者の多い社会となってしまった。そのような流れの中で売春島のようなアンダーグラウンドな産業は斜陽となり、地域の存続のための方向転換を余儀なくされている。島では、原発開発にも風俗産業にも頼らない観光地としての再開発をめざし様々な試みを行っているが、現実にはいまだに島は観光地としての昼の顔とは違う売春島としてのアンダ

ーグラウンドな夜の顔を持ち合わせている。

△「売春島」と呼ばれる島がある。そこにおいて売春はいわば伝統産業であり、明治期以降は近代化によってタブーとして公から隠蔽されながらも、確かな需要のもとに島を支えてきた。しかし、その伝統産業が近年衰退の一途をたどっている。いまや島の「表」の顔をつくり出す試みも伝統産業の前には虚しい。「あつてはならぬもの」として漂白されたものの中にも人間の営みがあり、そこにしか見出せない現代社会の実情が、世間の無意識のもとにまたひとつ、静かに消し去られようとしている。

この記事は「売春島」と呼ばれる風俗産業で経済が成り立っていた島が、様々な要因によって衰退を余儀なくされていることを取材したものである。「売春島」はバブルの頃は会社ぐるみの客で繁栄した。しかし、風俗の取り締まりの強化や不景気、全国的な風俗産業の形態の変化、若者の東京への流出といった問題が重なって、この島の風俗産業は回らなくなってきている。この状況を打開すべく観光産業への転換を計っているが、産業構造を転換することの難しさに直面している。

○中部・関西の風俗好きを中心に知られる孤島があり、俗に「売春島」と呼ばれる。明治以前から売春業で栄えた長い歴史を持ち、その伝統産業は近代化の中で「前近代的な性倫理」「売春」といった「あつてはならぬもの」の類として扱われ、公衆の面前からは隠蔽された。それゆえに島の必要性は高まり、公然のタブーとして重用されてきた。しかしこの島を必要とする社会階層の弱体化、地方行政の原発政策等の要因により、その伝統産業が廃れつつある。

△古くは売春島は風待ち港として機能し、船員に食事や宿と一緒に遊女を提供していたが、その役割を終えてからも売春業は島を支えていた。しかし、バブル期以降の経済弱体化にともない客足が減少し、さらに売春摘発や情報化がこれに追い打ちをかけた。これに対し観光産業の振興が目指されたが、売春業に比べて利益が少なく島の経済を維持するのは難しかった。また、この地域に原発を誘致しようという話もあったが、支持層と反対層の激しい対立の末に白紙撤回された。

売春島と呼ばれる売春を産業の中心とした島があり、かつては多くの人が訪れたもののバブル崩壊以後、日本経済の不振、法律による取り締まりの強化、またインターネットの普及による情報の普及等の理由によって島を訪れる人は減少していった。島で生まれた若者は島に居つくことなく、高齢化が進み、現在では観光に力を入れるも、島がかつての繁栄を取り戻すことはなく衰退の一途をたどっている。

明治以前から売春を言わば特産としている売春島。それがバブル崩壊を境に存亡の危機に陥っている。風営法による取り締まり、あるいは少子高齢化・過疎化といった今日の日本に普遍な問題がこの売春島にも広がっている。その対策として売春という裏の産業ではなくレジャー施設の整備を進める動きも見られた。原発誘致の問題も浮上し、島民は産業の選択(利益、リスク、将来性について)を迫られたが原発誘致は白紙に。売春島はどのように存続するのか。

遊女を船に貸し出して彼らを癒した「把針兼」というこの島の伝統産業は、近代化につれ、船乗りを農業・工業従事者に取り換えて「近代化」を遂げた。「あつてはならぬ」はずの近代の暗部は、公然と高度経済成長の基盤として機能していた。「売春島」は、かつて近代社会が生み出した「あつてはならぬもの」を抱えこんでそこにあった。そして今、原発という新たな「あつてはならぬもの」を引き受けるか、「あつてはならなかったもの」として切り捨てられるかの選択を迫られている。

巨悪を打ち倒した先にある希望を見ることの出きない現代社会は、複雑なリアリティを象徴化しては潰すことで誤魔化してきた。「現代社会とはいかなる社会なのか」という問いを解明するため、まず、周縁に追いやってきたもの、その一つの売春島に目を向ける。この島は近代の性倫理の導入にともなって主たる産業であった性風俗が規制され、対抗策の観光業も振るわない状況にある。近代化が推進される一方で、こうした地域は切り捨てられようとしている。

○ 日本にはかつて「売春島」と呼ばれる島があった。日本が高度経済成長期にあるころ、その島は売春などの裏の産業を担うことで、都市の繁栄に与ろうとしていたのである。それらの産業は不況と規制強化、情報化の中で消えていった。現在、この島は観光産業による自立を図っているが、衰退は進んでいる。本書は、このような歴史には残りにくい、風化し忘却されてしまう人々や生活を捉えていく。その先に、現代社会の真のあり方を見通すことができるのではないだろうか。(216字)

「闇の中」にある現代社会が持つ強い規範が達成されないという矛盾を抱える葛藤は「周縁的な存在」に確認できる。「買春島」はそのひとつの例で、近代以降制定された数々の法律でその「伝統産業」(買春)の衰退を余儀なくされた島は「表」の顔として始めた観光地としての事業だけでは経済が回らず結局「裏」の顔も持ち続ける。また同じ灘に面する海岸では「原発に依存した安定」かその他の産業か選択することもあった。これらは華々しい近代化の「裏」の顔で、その極致において切り捨てられようとしている。

古くから売春が伝統産業のように行われ、隆盛を極めた島がある。しかし2000年以後の法律改正による摘発などで売春業は衰退の一途をたどり、島を訪れる者は減り、1地方自治体として存続の危機に瀕している。今では「裏」の顔を捨て、「表」の顔を獲得しようと地域は自立を目指す。近代化によって社会の中心から周縁へと追いやられた闇の中の現代社会を象徴するような売春島の未来は如何様か。

日本社会は華々しく近代化してきた一方で「あつてはならぬもの」を人々の前から“漂白”してきた。現代社会の闇は、「売春島」や「原発誘致をせざるをえない貧しい地域」といった、発展の裏に生まれた「周縁的な存在」の矛盾とリアリティにこそ見えてくる。「現代社会とはいかなる社会なのか」という問いを解明するために必要なのは、社会に『補助線』を引くことで、複雑なものを複雑なままに理解しようとする努力だ。

本連載の目的は、現代社会の実像を捉えることだ。その手段として、「周縁的な存在」にアプローチする。彼らは、「あつてはいけないもの」が漂白されていく中で、社会の矛盾やリアリテ

ィを引き受けているからだ。

最初の具体例は、「売春島」だ。現在この島は景気の悪化・摘発の強化・情報化、すなわち現代社会の煽りを受け、衰退している。島は新たな産業で生き残ろうと必死だが、一方で裏の顔を捨てられずにいる。

△おかしな島があるらしい、と聞いて著者が向かったのは売春島と呼ばれる島だった。そこはかつて大勢の女性がいる遊楽街だったのだと昔客引きをしていたという老女は語る。しかし、バブルの崩壊や相次ぐ摘発、そして情報化する社会の中でそのミステリアスさが失われたことでその姿は今や島から切り捨てられようとしている。

現代社会は以前のように容易に巨大な悪というものを想定し、それに打ち勝つことで希望を見出そうというところが出来なくなってしまった。「売春島」をはじめとして「あつてはならぬもの」とされてきたものが漂白され見えなくなりつつある今、著者はその「闇の中の現代社会」を立体的に描きだそうとする。

「売春島」と呼ばれる関西の島では、古くから遊女たちが売春を生業とし、島の経済を支えてきた。高度成長期からバブルの時期には、農業や土建業の男性たちが大挙してやってきたが、日本経済が成熟するにつれ客足は大幅に減った。島は下世話な興味の対象にされ、虚像に包まれている。しかし実際には、一地域として独立した経済を営むことのむずかしさに苦しむ小さな地方の島のひとつに過ぎないのである。このような地方に、売春でカネを稼ぐことが「悪」だと断言することはできないのではないか。